科学史のこぼれ話（その1）

ファーブルとミル

能澤正雄

1973年にコンラート・ローレンツ（オーストリア），ニコ・ティンバーゲン（オランダ，後年，弟もノーベル賞，経済学，を受賞）等が彼らの動物の比較行動学“エソロジー”の業績によって医学・生理学賞を受けた。ガンの雛が，生まれて最初に見る，動く物を親と認識する刷り込み（インプリンティング）現象を発見する等，多くのことを明らかにした。彼らの仕事のずっと以前に，昆虫の世界での行動生態学とでも言うべきものを築き上げ，世に問うたのはジャン・アンリ・ファーブルである。南フランスの田舎教師をしていたファーブルが，偏狭な心のカトリックの僧侶や信者によってその職を追われたときに，経済的な救いの手を差し伸べたのは英国の古典経済学の大家ミルであった。

昆虫記を書いたファーブル（1823〜1915）がアヴィニョンの師範学校を卒業して小学校の先生になったのは，1842年19才のときである。年俸約700フランであった。1844年10月には，やはり小学校の先生をしていた若い婦人と結婚している。彼は勉強家だったので，独学で勉強のうえ試験を受け，その後間もなく中学校の数学と物理の教員免許状をもらっている。1848年にはコルシカ島の中学校に年俸1,800フランで物理を教えるために赴任した。

コルシカ島の自然は彼を魅了し博物学に引き寄せられていくのである。ここでアヴィニョン生まれの博物学者ルキアンの弟子となるのであった。その後，トゥールーズ大学の有名なタンドン教授の来訪を受け，二週間ばかり共に暮らし，採集と討論の機会を得ることになる。特にタンドンが示したカタツムりの解剖は，ファーブルのそれまでの単なる採集と観察のみの方法を変えさせることになった。

しかし，今日でもなお不衛生きわまるこの島での朝な夕なの長時間の歩き回りは彼に熱病を齎らし，コルシカを去るのを余儀なくさせたのであった。1853年，彼はアヴィニョンの中学へ転任したのである。しかし，俸給は1,600フランに下げられた。

1858年，セポイの反乱を機にイギリスの東印度会社が解体され，政府が直接に印度統治に乗り出すことになった。当時，東印度会社で審査局長として働くとともに論壇で活躍していたジョン・スチュアート・ミル（1806－1873）は，長い間の困難を解決して，美しくて才能豊かなハリエット・テーラーと結婚（1851）していたが，これを機会に研究に専念するため南フランスの静かな町アヴィニョンの郊外にやってきて住んでいた。ミルは，ここで有名な“ミル自伝”や“代議政体論”を書いている。たまたまファーブルがその管理を依頼されていたルキアン博物館を訪れたミルは，ここでお互いに知合うことになった。

ミルは，植物学にも造詣が深く，付近の豊富な植物相を見た彼の提案によって二人は連れ立って植物採取によく出掛けていた。この頃，ファーブルはアヴィニョンの市民講座をも受け持っていたが，そこでの講義は，当時としてはあまりにも新しい方針によっていたので，頭の古い人，党派心の強い人，偏狭なカトリック信者たちを敵にまわすこととなった。正規の学校もでていない男，植物の繁殖の話しをして若い女性を惑わす男などと非難されたのである。その結果，ファーブルは教職を追われ，住んでいた家の明け渡しをも要求されることとなった。しかも彼はいつも通り，金がなく困りきってしまった。万策つき果てた彼は，考えあぐねた末

に，ミルに手紙で助けを求めた。

その時，ミルは議会開催中でロンドンに帰っていたが，3,000フランもの大金を借用証書も無しにポンと貸している。1860年前後のフランスは，ナポレオン3世の治世で，有名なナポレオン金貨が多数造られた時代であった。この金貨は現在でもフランスやカナダでは銀行で容易に購入することが出来る。標準のものは，1／4オンスの重さで20フランの刻印がある。1989年現在の金の国際価格で概算すると当時の20フランは，日本円に換算して約13,200円に相当する。したがって3,000フランは198万円になる。昔の貨弊価値の推定は難しいものであるが，金の価値がインフレについていくとしてこうなる。当時の貨弊流通量は現今のそれと比較にならない程少ないであろうことを考えると，ファーブルにとっては，大きな助けになったことであろうことは容易に想像できよう。

ファーブルが定職につくことを諦めて，“昆虫記”全10巻の執筆に専念するのはこのようなことがあってからであった。真に創造的な仕事を成し遂げるような人々は，世間の評判に惑わされず，直ぐに心から理解し合えるもののようである。

（原子力データセンター・専務理事）